



題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

一般財団法人 友愛

〒112-0002

東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文ビル2階

TEL:03-5684-3188

FAX:03-5684-3186

E-Mail:you-i@yuai-love.com

http://yuai-love.com

発行人：川手正一郎

編集人

隔月1回 10日発行

年会費
2,000円

日中緑化交流基金

第29次友愛植林訪中団派遣 北京大学学生も参加

陝西省宝鸡市麟遊県第三期・遼寧省朝陽市北票市第二期植林を実施

北票市では元気に育っている昨年の植樹を確認

四月十一日(水)から四月十六日(月)までの六日間、第二九次植林訪中団が中国に派遣され、陝西省宝鸡市麟遊県、遼寧省朝陽市北票市の二カ所で植林活動を行った。代表団はその後北京に移動し、友愛講演会感想文コンクールの表彰式、友愛サロンでのシンポジウム、中国宋慶齡基金訪問など多くの事業を実施し十六日帰国した。今回の植林訪中では、北京大学で学ぶ四名の大学生(梅津剛・高橋博也・松本英幸・渡辺栄香)が現地合流して参加、日中の懸け橋となることを目指して学ぶ大学生にとって、日中友好交流の実践を学ぶ良い機会となった。

陝西省宝鸡市麟遊県では、昨年同様に雨が降り注ぐ中で植林となった。また、遼寧省朝陽市北票市の植林現場も昨年同様強風が吹き荒れており、双方の植林現場の自然条件の厳しさが伺い知れた。

しかし、そんな厳しい状況にもかかわらず、北票市では昨年植えた苗木が大きくなり、しっかりと根を張っている様子が確認できた。更なる成長を祈らずにはいられない。

今回の訪中では、北京大学に留学中の四人の大学生が参加、日本からも高校生が一名参加しており、現地のボランティアの青年達と一緒に、悪天候にもめげず植林する姿は、植えた木々と同様に、日中友好の精神は、次代に繋がっていくことが確信できた。

参加した学生諸氏からの感想文をご紹介します、報告記事とする。

第二九次友愛植林訪中団

鳩山由紀夫・鳩山幸・川手正一郎・香葉村亮・高邑勉・清水瀬名・羽中田元美



陝西省宝鸡市麟遊県植林地
雨の降りしきる中濡れながら参加者に呼びかける鳩山由紀夫理事長



陝西省宝鸡市麟遊県植林地
「雨にも負けず」元気に話をする川手正一郎常務理事



遼寧省朝陽市北票市植林地
強風が吹き続けるなか、子供達は笑顔で待っていてくれた



遼寧省朝陽市北票市植林地
参加の子ども達に段を降り、近づいて話し掛ける鳩山由紀夫理事長

泥の中で見つけた種

北京大学 大学院修士
梅津 剛

二〇一八年四月十一日から十三日の三日間、日本友愛の訪中植林活動に参加させていただきました。

自分は長年中国で生活してきましたが、この様に正式な日中友好交流活動に参加する機会はなかなかありませんでしたので、期待するものは大きく、嬉しい気持ちでいっぱいでした。

初日は陝西省青年連合会による夕食会で、美味しいご当地料理や白酒をいただきながら、今回の植林活動でお世話になる中国側の方達とお話し、自分も通訳をさせていたがながら、友愛メンバーと中国側代表たちの話を聞いていて、次の日の植林の成功及び今後の日中友好を祈りました。

翌日は朝早くからバスで植林事業の起工式会場へ出発、目的地は宝鶏市麟遊県。生憎の雨で、山道は車がスタックしてしまう程の進みづらい状態でした。にもかかわらず、起工式の現場には沢山の生徒やボランティアの方々が我々の到着を待っていてくれて笑顔で迎えてくれました。

自分が小さい頃の中国人はまだ反日感情が強く、こんなことはありえませんでした。麟遊県の皆様には本当に感謝で感動です。

そして、挨拶に立った鳩山理事長は、傘もささず、一人一人に話しかけるように「雨天友愛」の話をされ

ました。ここに集った人々に、感謝の気持ちを伝えていました。そして習近平主席の「人類命運共同体」に触れ、環境問題について話をされました。実際にこの植林活動も二〇〇年から十八年間も中国各地で継続しているとのこと、環境問題に国境は無いことを改めて実感しました。

とても印象深かったのは、川手正一郎常務理事が、参加している若者たちに投げかけた言葉でした。川手常務理事は彼らに「元氣・やる氣・本氣」と

八十六歳とは思えない、元氣いっぱいな声で若者たちに話し、決してこの三つの「氣」を忘れず生きていくということをお話しされました。雨の中、植林活動に参加してきた若者たちを見て心から喜び、ご自身の信念を訴える川手常務理事を見て、川手常務理事の日中友好・環境問題に対する「元氣・やる氣・本氣」が心の奥まで伝わってきました。

その後、鳩山理事長ご夫婦、川手常務理事、洪桂梅副主任、麟遊県副県長も参加者と共に木を植えました。雨のせいで、みんな泥まみれ状態になりましたが、それでも頑張って木を植えました。

植林は、すぐに結果は出ませんが十年後や二〇年後になると木も育ち、この辺りも林になり、森になり、きっと環境は改善されるだろうと思いました。そして、子々孫々たちは、環境改善に役立っているこの木々は、日中両国の人たちが共に植えた木であること

を知り、日中の友好を感じるだろうと、一生懸命木を植える地域の人々の表情から信じていることができました。

自分も将来は日中友好のために役に立てる事業を展開することが、目標です。自分の人生目標の実現のためにも、今回の植林活動は本当に貴重で一生忘れない経験です。

鳩山理事長ご夫婦、川手常務理事、羽中田事務局長などの友愛メンバーから感じた友愛精神は、自分の心の中に形にはならない、熱く燃えるしつかりとした種として埋め込まれました。

これからの成長で友愛精神の種を育て、将来にはきっと日中友好のため、人類命運共同体を実現するため「元氣・やる氣・本氣」で進み続けていきたいと思っています。



陝西省宝鸡市麟遊県植林地
雨の中の植林活動。植えた木々の生長を願って、今後の日中友好の進展を信じて、手を重ねて誓いの円陣での握手。まさに雨天の友の誓いが結ばれた。
写真：田陣の右から三人目 筆者の梅津剛さん

友愛時評

▼五年前、英オックスフォード大学の研究者が「雇用の未来」と題する論文で「今後一〇〜二〇年で米国の総雇用者の約四七%の仕事が自動化されるリスクが高い」と指摘し、全世界に衝撃を与えた。その後、頭脳ゲームの最難関と目されていた囲碁でも人間はコンピュータに凌駕され、いよいよ人工知能が人間の知性を超える「シンギュラリティ」が近づいている。そろそろ、様々な職業がなくなる未来像がおぼろげに見えてきても不思議ではない。▼折しも大学生は就活真っ最中であるが「空前的売り手市場」ともいわれる中で、安定・高収入で常に学生の志望ランキング上位だった銀行は大きく順位を下げた。それどころかメガバンクからの転職希望が急増しているという。金融業にはコンピュータ化できる要素が大きいと「雇用の未来」論文も指摘していたところだが、国際的に見てもかなりコスト高である邦銀は大規模なリストラ過程に入ったというところなのだろう。▼他方で、絶滅確実とも言われていた営業職は、AI時代に突入しても意外と強靱のようだ。むしろ感情の理解を必要とする点で、コンピュータでは代替できない。▼同様に、役所の規制や許可権に関わる職種も簡単には淘汰されないようだ。最近では、グローバル化に抗した「再国民化」の強まりも世界大に見られる。各国個別の規制やそれに対応する職種もまだ二〇年以上しぶとく存続するのかもしれない。▼そんな近未来の様々な可能性を想像しながら、職業選択に悩む学生の相談に乗っている。(ヒゲ)

雨の中で木を植える！

北京大学 大学院修士
高橋 博也

鳩山由紀夫理事長をはじめとする一般財団法人友愛関係者の皆様、友愛が平成十二年度より行っている中国における植林活動に参加させていただき本当にありがとうございました。

また、是非参加してほしいと言ってくださった北京大学の先輩でもある高邑勉さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

植林活動の当日は晴天には恵まれなかったものの、決して豊かでない地方都市の田舎で暮らしている宝鶏市麟游県の高校生の皆さんが満面の笑みで我々の一行を迎えてくださいました。

植林をしながら鳩山理事長が総理大臣時代に「人生には二人の友がいる。晴天の友と雨天の友である」とおっしゃったこの言葉を思い出しました。晴れた時には



陝西省宝鶏市麟游県植林地
ぬかるみの中、靴には厚く泥が付いてしまう。どんなにとつてもダメだと苦笑。鳩山理事長ご夫妻

人が集まってくることは言うまでもありませんが、いったん人生に雨が降ると、一人去り、二人去りと消えてしまうものです。私たち日中青少年が日中友好のために、まさに互いに雨の友になろうとしていました。

この植林活動に来てよかったなと素直に感じました。夜の食事会にて副県知事さんから麟游県が皆さんの第二の故郷になってほしいという言葉が挨拶の中でありました。何年後かに必ずここに帰って、友愛の皆さんと中国の青年たちと一緒に植えた木の成長ぶりを見たいと思います

また、活動最終日に羽中田事務局長からこんなお話を伺いました。「友愛の理念を支えているのは自立と共生の精神である」と唱える鳩山由紀夫理事長のもと、友愛は活動を続けているのです。

この「自立と共生」という言葉は私の心に変化を響かせました。自立こそが成功への



西安市／空海の学んだ青龍寺にて
【写真】左から梅津剛さん、この欄の筆者、高橋博也さん、清水瀬名さん、高邑勉さん

の第一歩だと改めて感じました。ずっと日中友好の架け橋になると言ってきたのですが、もう一度自分が今何をするべきかを考え、行動に移したいと思います。

最後になりますが、日中関係が良いとも悪いとも言えない今日、日中友好のために一人でも多くの雨の友が増えていくことを願います。大変素晴らしいものをこの植林活動を通して学ばせていただきました。ありがとうございました。

改めて考えた事

北京大学 経済学部
松本 英幸

四月十三日と十四日の二日間で鳩山先生及び友愛の皆様と同行し、遼寧省の朝陽市の植林活動に参加しました。日中ハーフとしての責任を改めて認識することができました。

日本生まれで中国育ちの私は幼い頃からずっと中国で暮らしてきました。中国で日本好きの人や抗日感情



遼寧省朝陽市北票市植林地
昨年植えた苗木が二十センチほど育っていた。根もしっかり張っている。鳩山理事長は慈しむように木をなで、声を掛けていた
【写真左端】筆者の松本英幸さん

を持つている方など、いろんな人と接してきましたが「日本のことが大好きです」を言ってくれる人が「日本大嫌い」を言う人より圧倒的に多いと感じていました。しかし、日本では「中国は嫌だ」と思う人が、やはり大半を占めていることを最近感じました。私はこの状態に対して非常に残念だと思い、日本に向けて中国の良さを伝えたく思っていました。

今回、鳩山先生と川手正一郎さんにお会いすることができて本当に嬉しかったです。お二人の日中友好に対する貢献をこの二日間で見ることができました。

私も今後、日中ハーフとして鳩山先生と川手正一郎さんみたいに日中友好に貢献できる架け橋になりたいと改めて強く思いました。

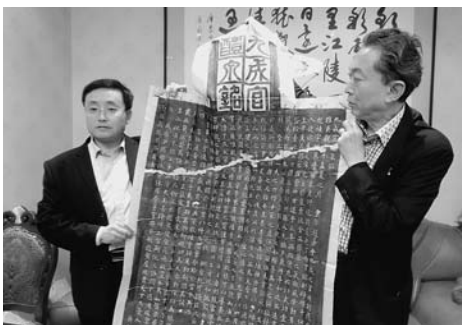
何より「友愛」という理念に共感することができました。鳩山先生、川手正一郎さんの熱いスピーチや羽中田元美さんとの会話で少しづつ「友愛」の考え方や



遼寧省朝陽市北票市植林地
乾いた山肌が続く。十年後二十年後の緑に覆われた姿を祈って植林

主な理念を知ることができ、特に「自立と共生」は物凄く共感しました。人は自立している現代社会において、特にアメリカや日本みたいな先進国では、実際に無報酬で人を手伝うことは少なくなっている中で、私もなかなか無報酬で仕事をしないようになりまし

た。しかし、この度「友愛」の理念を知ること、自立に対しての認識を改めて変わりました。現代社会には自立は自己中心になり、自立の本来の意味がなくなっ



世界的に有名な「九成宮の石碑」の拓本が贈られた。貴重な資料だけに通し番号が打たれている



陝西省西安は遣唐使が派遣された日本と縁の深い地である。空海が学んだ青龍寺にて記念撮影

てしまいます。自己中心的存在にならないために、まさに友愛の精神が必要となると強く思いました。以上がこの植林活動に参加した個人的な感想です。

鳩山先生を始め友愛の皆様、現地の方々その他この植林で出会った多くの方に、感謝を込めてお礼を申し上げます。

植林訪中に参加して

代々木高校三年
清水 瀬名

かつて、ある海外の国でスラムを初めて目にし、そこに対して何もすることができない自分の無力さが歯がゆくて辛い、という経験をしました。

「こんな自分でも何か役に立てることはないのだろうか？」と模索する中で「友愛」に巡り合いました。

相互に尊重し、理解し、助け合う「自立と共生」の社会づくりという理念を掲げる友愛の活動に感銘を受け、友愛協会の会員となりました。

友愛の精神に国境はなく、近隣国と様々な民間交流で友情の絆を結ぶことは両国間のわだかまりの解消にもなり、その一つに「中国植林事業」の活動があることを知りました。

また植林は環境保護と地球経済活性化の両面が期待でき、その土地の未来に希望をもたらしものであると知りました。

他国、特に近隣国における環境問題は、国の内外という視点を越えて、地球上

のあらゆる人々、生物に関係しています。環境問題への危機感について、あまり知る機会のない人たちに積極的に啓発に務め、問題点を目の当たりに知るきっかけを提供することが不可欠だと感じました。

様々な思いが巡る中、ついにやって来た植林訪中の朝。「小さな私でも地球や人々にとって良い事をするお手伝いができる」という喜びで一杯でした。

北京、西安、宝鶏、瀋陽、北票、錦州などを巡り、二ヶ所で事業起工式などが行われました。

鳩山由紀夫理事長をはじめ、友愛協会の訪中団の素晴らしい人達との出会いがあり、共有できていた時間や、現地で出会えた人々との語らいの時間は私の宝となりました。若輩者の私に皆様は温かく多くのことを教えてくださり、中国の歴史に残る名所を訪ねたこと、円卓を囲んだ食事会など、どれも内容の濃い、経験したことのない刺激的な時間でした。

この植林活動をずっと続けてこられたという川手正一郎さんから、荒れた原野が緑の大地になったとお話を伺い、私も将来その光景を見てみたい、という口マンを重ねました。植林の背景にある訪中団の皆様の友愛精神に、ただただ、参加させて頂けてよかった、と思うばかりです。

また、北京大学に通う年の近い先輩との出会いもあり、こうした友情の積み重ねをずっと大切にしていきたい、と思いました。



遼寧省朝陽市北票市植林地
地元の子どもたちと一緒に木を植える鳩山由紀夫理事長
【写真後列右端は、筆者の清水瀬名さん】

シンポジウム「友愛サロン」開催

中国・韓国・ロシア・日本の学生が一堂に

鳩山理事長の問いかけた「環境問題」に活発な議論展開

四月十五日(日)、北京の二十一世紀飯店において、シンポジウム「友愛サロン」が開催された。

これは北京で大学に通う各国の学生を集めて行われたもので、中国、韓国、ロシア、日本の大学生約三〇名が参加した。

中国国際交流センターの洪桂梅主任の呼びかけもあって、急遽開催されたにもかかわらず、多くの学生が参加、活発な意見交換が展開された。

冒頭鳩山由紀夫理事長は「今日は私が話をするより、若い皆さんの意見を、私が拝聴する方が良いと思います。是非意見を聞かせてください」と学生達に呼びかけ、テーマとして「北極の氷の融解を含め地球温暖化など環境問題」を掲げた。ゴミ処理、自然保護、そ



参加者全員で記念撮影。日本、中国、韓国、ロシア、友愛理念のもと、若者同志の交流発展に期待

れに伴う各国の取り組みなど、意見が述べられた。また、これらの問題の解決のため、学生による「起業」に対する支援、援助などの仕組みが欲しいとの要望も上がり、熱のこもった議論が交わされた。



友愛サロンは、中国式お茶のおもてなしから始まった。写真最前列左端は、センターの洪桂梅主任



友愛の理念を広く伝えたいと発表。ロシアグループのブリヤコフ・ダニエルさん

・ダニエルさんが流暢な日本語で発言した次の言葉が印象的だった。「私は外交官になると思います。どこの国に派遣されても必ず行った先で友愛の理念を伝えたいと考えています」。鳩山理事長始め参加者が、惜しめない拍手を贈った。



韓国の学生グループ。環境問題に関して、積極的に発言していた。写真左端はセンターの王希宏部長



中国学生代表のグループ。鳩山理事長は研究本も発行される程の人氣ですと話していた

奨学金対象 講演感想文「私にとって友愛とは」

表彰式開催 二位呉荊さんは、流暢な日本語でスピーチ

入賞作品三位三名の全文紹介

四月十五日(日) 北京の二十一世紀飯店において、「友愛講演会」感想文コンテストの表彰式が行われた。講演会は、昨年十一月に実施され、北京理工大学・北京語言大学・中央民族大学の学生が参加。この内、北京理工大学日本語学科の学生を対象として、上位入賞者に奨学金が贈られる。また、入選者全員に、賞状と記念品が贈られた。鳩山由紀夫理事長、川手正一郎常務理事、羽中田元美事務局長がそれぞれ賞状と記念品を授与した。前号に続き、三位を受賞した三名の作品を紹介し、全文本人から寄せられた文章を原文のママ掲載しております。

実施会場には北京理工大学の学生が早くから集まっていたが、洪滞の影響で、代表団の到着が一時間以上遅れてしまった。鳩山由紀夫理事長は、挨拶に立ち、



鳩山由紀夫理事長から一位受賞の呉荊さんに賞状が授与された。記念品は、幸夫人がプレゼンターを



鳩山由紀夫理事長は、これからは日本語を学び、日中友好のため活躍してくださいと語りかけた

友愛と尊重

毛 仁言／二年生

先日、鳩山由紀夫先生の友愛についての講演を聞いた。初めて、自分の身近な面からだけでなく世界の立場に立って「友愛」という言葉の意味を多角的に理解でき、深く感動した。先生の「友愛は両者の信頼関係によって成り立つ愛で、言い換えればお互いの人格を尊重すること」という定義に強く共感したためだ。

なぜこんなにも鳩山先生の説く友愛に共感したのか考えてみた。それは、今年の夏に制定された「中国視聴ウェブ番組審査規則」によって、同性愛に関する番組が放送禁止になったことに関係している。多くの人々は、なぜ中国はすでに精神病の一つである



三位
二年生 毛 仁言さん

トランプ大統領は一方的にエルサレムをイスラエルの首都だと正式に認定した。これは、イスラエルとパレスチナ間の政治や外交問題への干渉であり、相手を尊重する友愛ではない。友愛のない国家間の関係が、果たして平和を生み出すことができるのか疑問に思う。

私たちはまだ大学生だから、国際関係は自分たちとは関係のないことだと考える人がいるかもしれない。しかし、視野を広げて友愛の観点から世界情勢を考えることも必要だと思う。同時に、日々の生活を通じて身近なところから友愛を実践していくことも大切だ。

鳩山先生の講演を聞いて、友愛の最も大切な精神は相互尊重という悟りであるとつくづく思った。それは、子供のころから身につけていくべき素養の一つなのではないかと思う。

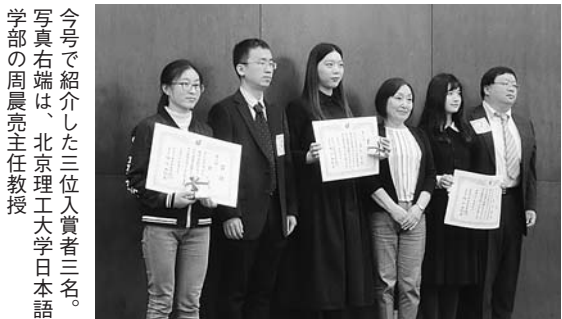
私にとって友愛とは

張 莹／三年生

友愛とは、一体どういう意味なのでしょう。先日、鳩山由紀夫元首相の「友愛・平和」についての講演を聞いて、感銘をうけ



三位
三年生 張 莹さん



今号で紹介した三位入賞者三名。写真右端は、北京理工大学日本語部の周麗亮主任教授

ました。それをきっかけにして、友愛について自分でもいろいろ考えました。すると、今まで気づかなかったのですが、実は、友愛は以前から私にとって、大切な意味があるということがわかりました。

子供の頃、私にとっての友愛とは、友情でした。友達はお互いに助け合い、尊重しあいます。それは友愛の形の一つだと思います。

私は大都市上海で生まれ育ちました。一人っ子なので兄弟もいないし、両親は仕事で忙しくて、いつも一人で寂しかったです。そんな私の心を癒してくれたのが友達でした。

平日は一緒に遊んだり、おしゃべりしたり、学校に通ったり、友達はいつも私のそばにいました。毎日、放課後に、「また明日」とお互いに声をかけあったのですが、学校がある平日は必ず会えるとかわっているのに、翌日にまた会えたときの嬉しさは格別でした。家に帰っても、休みの日でも、友達とは永遠に一緒にいられるのではないかと思

いました。友達の優しさも笑顔も昂のようにびかびか輝いて、寂しい私の支えとなって、心を暖かくしてくれました。喧嘩も時々しましたが、いつもすぐ仲直りしました。いつでもそばにいて、お互いに助け合う私と友達の関係は、当時友愛という言葉こそ知らなかったのですが、まさに友愛の気持ちとして幼い私の心に深く刻まれました。

18歳で成人し、大学生になったあと、私の友愛に対する理解は少し変わりました。今の私にとって友愛とは、人間にとって必要な精神であり、一致団結することです。その団結は、相互理解、相互尊重、お互いに助け合うという思想をもとに生まれたものです。

人と人の間に、友愛精神はよく見られます。「友愛は友人の間に存在するだけではなく、見知らぬ人々の間にも友愛は存在すべきだ」と思います。アリストテレスによると、「人間は社会的な生物なのだ」そうです。換言すれば、人間は一人で生きられないのです。中国には「団結は力なり」というそれを表すことわざがあります。一人の力は弱いけれど、集団になれば強くなる、という意味です。ですから、人々の間に友愛が存在してきたからこそ、人間は今日まで生きてい

るのです。個人の力は小さいけれど、子供たちの成長に役に立てれば、と思い、大都市育ちの私には、最初は少し辛い環境でしたが、頑張って子供たちと生活を共にし、全力で授業をしました。

今、私には小さな夢があります。「国々の間に友愛の原則を広めて、一緒に世界の平和を守る」ということです。世界の平和を心から祈っていますので、その実現のために、私は友愛の理念を堅持し、より美しい世界のために頑張りたいと思います。

私にとっての友愛とは、友愛とは何か。一見、膨大な意味を含む語だと思えるが、今年の夏休みに参加した交流活動での日本人の大学生との交流から、友愛について私なりに考えた。それは日中交流基金と中日学生連盟の共催で行われた交流活動だった。日本で大手商社などの企業を訪ね、日本人の学生と一緒にディ

スカッションし、課題に取り組む。私も常にこの「友愛の原則」を心に記し、この考えを実践しています。大学一年生になってから、学校の主催するボランティアに参加して恵まれない地域の子供たちに授業をしました。私はこの友愛の思想を子供たちに教えてあげたいと思

うのです。個人の力は小さいけれど、子供たちの成長に役に立てれば、と思い、大都市育ちの私には、最初は少し辛い環境でしたが、頑張って子供たちと生活を共にし、全力で授業をしました。



三位 四年生 班 宇識さん

*入選作品全編掲載の小冊子を作成しました。ご希望の方は事務局までお申込ください

り組んだ。中国と日本で連携して番組を作る提案をしたり、文明堂を見学して中国と日本のお菓子文化を比較考察したり、以前ならば考えたこともないようなことに、精一杯取り組んでいた。その傍ら、一緒に料理を作ったり、夜遅くまで懇親会をしたりした。私たちが帰国する日、皆涙くみ、「また会おう」と言って名残を惜しんだ。

日本人大学生の何人かは「班ちゃん日本語が話せるのに、私は中国語が全然話せない」と悔しそうに言い、夏休みが終わってから中国語の勉強を始めてくれた。

印象深かったのは宮城県から来ためぐちゃんの、活動のホームページに寄せたメッセージだ。

中国は近いようですごく遠い国で、そこに住む中国人とは一生涯理解しあえないと思ってた。優しくて温かくて素直な人たちと関わりを持たずに暮らしてきた二〇年がもったいなく感じるぐらい素敵な人たちに会ってよかった。

これは、活動参加者全員の思いを代表していると思う。

中国と日本は距離的に近い。共にご飯の時に箸を使う「お箸の国」だ。「カンパイ!」の発音も中国語とよく似ている。なのになぜ「近いようですごく遠く」と感じるのか。

今回のような大学生間の交流ばかりでなく、他分野での交流も一層進めばいい

と思う。やはり相互理解したい気持ちをも、両国の若者が持つことが大切だ。それは相互尊重・相互扶助につながる。必ずめぐちゃんのように中国人を理解してくる日本人も出てくるだろう。公式な政府間関係が芳しくない「近くて遠い両国」の現在、それはたとえれば雨が降り続けているような時期だ。そんな時期に友だちになった私たちは「雨中の友」、きつとこれからも真の友であり続ける。

中国の若者によく知られている「心有多大、你的世界就有多大」という言葉がある。自分の心の大きさををもって、自分の世界の広さを変えていくということだ。私は異文化についての理解と好奇心を「呼び出す」不思議なものが「友愛」だと思っている。友愛によって、異文化に関する見聞を広め、私たちの文化との間に永く堅固である橋を作りたい。

ひとごま

左の写真は奈良の唐招提寺のお堂を下から写したものです、と言われても納得してしまうのではないでしょう。実は西安の青龍寺の底です。遠い昔、鑑真和尚を始め、僧侶達は海を越え、難儀な旅を繰り返して、日本に仏教文化をもたらしてくれました。弘法大師・空海は、日本から留学した僧侶の一人です。



見上げていると時空瞬間移動しそうな気がします。思えば多くの事柄を中国から学んでいるのですね

中国で尊敬を集める宋慶齡女士の名を冠した基金会は、子供の教育に力を入れています。その基金会訪問の折り、ご馳走になった昼食の一品です。様々な手のこった料理の中で、野菜を蒸しただけのこの一品は目を引きました。素材は素朴な物、書道の筆を中心に設えられています。ちなみに筆は長芋、墨は味噌でした。



「書」の文化は、中国では今も人々に尊重されています。野菜で表現された書道道具は可愛い!

時事川柳 服部迪夫 作

―東日本大震災七年はまだら模様の通過点―
―無心の強さ―
―伸びしろは十代選手の特権―

―クローズアップ―
ここにきて文武両道栃の心
―大関への足掛かり―
二桁の重さを知った栃ノ心
―まず天守閣―
熊本に絵になる城はいつ戻

―米・英・仏シリア攻撃アラビアのロレンス想うタマスカス―
―愛媛県今治市開学と逃亡劇がタテとヨコ―
―首脳会談―
半島に日本の色が写らない
―開花日が同じ―
北海道梅と桜がゴールする

機関紙『友愛』にご投稿ください!

機関紙『友愛』に皆様のご投稿をお待ちいたしております。内容は、ボランティア活動の報告、地域の名物の紹介、季節のお便り等々、何でも結構です。ご自慢の写真も大歓迎です。皆様の『友愛』に奮ってご投稿ください。詳しくは事務局までお問い合わせください。
締切り：特に設けません。いつでもご投稿ください。掲載ご希望の月がある場合は、2ヶ月前に原稿が届くようお願いいたします。
要領：手書き原稿・データ原稿・メールでの投稿何でも対応可能です。
写真：紙焼き(カラー・白黒)・デジカメデータどちらでも。

植林集の記

◆四月の中国植林に、また参加しました。一期一会を念頭に毎年これが最後と思いつつ、つい今日まで続けてきました。植林の醍醐味は既植林地を見ればだれでも得心します。植林当時の写真を持って行っても砂地と、目の前の緑のイメージは全く異なり、思い出せません。そんな心境です。で記念碑を発見した時の驚きは強烈で言葉に表せず、まさに感動そのものです。中国の大地と現地の方々に後生を託し、輝く緑の推進と真の日中友好を希求し合掌します。(K)
◆四月の訪中は大変なスケジュールでした。陝西省宝鸡市と遼寧省北票市での植林、この間の距離直線で約一五〇キロ。最寄りの空港から植林現場まで、四〇〇キロ移動など、中国の広さをしみじみ実感できました。その後北京に移り、友愛奨学金の表彰式、友愛サロンの開催、中国宋慶齡基金会訪問など事業が目白押しで、数回の訪中で初めて空港、ホテル、事業地、帰国という経験をしました。とは言っても、千キロも離れると、同じ中国でもここまで違うのかと思える、各地の美味しい料理に巡り逢ったり、空海縁のお寺を訪ね感動したり、充分に刺激的な旅でした。北京大学の学生さん達と会えたのも貴重な巡り会いです。旅という非日常がもたらす出来事は、すべてが「永遠の一瞬」であると思います。(も)